

令和7年度 核兵器廃絶平和都市宣言事業

「中学生による広島市訪問事業」

文集



会津若松市

はじめに

会津若松市は、昭和60年8月6日に、日本国憲法の平和精神に基づき、核兵器の廃絶を誓う全世界の人々と相携え、永久平和確立のため、「核兵器廃絶平和都市」を宣言いたしました。以来、「広島市から被爆体験者等を招いての被爆体験講話」や「広島・長崎原爆被災パネル展」を開催するなど、様々な事業を実施しています。

この事業の一環として、市内中学生の代表による被爆地広島市の訪問を実施しました。

広島平和記念公園や広島平和記念資料館の見学、「第1回全国平和学習の集い」での被爆体験講話及びグループディスカッションへの参加、さらには平和記念式典への参列などを通して、戦争や原爆がもたらした深い悲しみと癒えることのない心の傷を真摯に受け止め、命の尊さや平和への願いを心に刻みました。

その想いを感想文としてまとめましたのでご覧ください。

核兵器廃絶平和都市宣言

核実験、核兵器の使用が人類を破滅に導くことは必至であり、その唯一最大被害者たる日本国民は凄惨な原爆災痕を世界各国に認識せしめてきたのである。

しかしながら、今日なお世界の動きは、核兵器の製造、実験が繰り返され、国際情勢も極度に緊張を加え、核戦争の危機をはらんでいることはまことに憂慮すべきことである。

私たちはこのような、人類を脅かす核実験、核戦争の禁止を求め人類の幸福と平和を念願するものである。

ここに会津若松市は日本国憲法の平和精神に基づいて、核兵器の廃絶を誓う全世界の人々と相携え、永久平和確立のため「核兵器廃絶平和都市」であることを宣言する。

昭和60年8月6日 会津若松市

目次

八十年前の「よく晴れた日」を前にして	1～2頁
広島訪問を通して	3頁
戦後80年の広島を訪問して学んだこと	4～5頁
広島訪問を通して	6～7頁
「広島訪問」を終えて	8頁
広島訪問を通して	9頁
広島訪問	10～11頁
広島訪問を経て感じたこと	12～13頁
広島訪問事業を通して感じたこと	14頁
広島訪問を通して	15頁
広島訪問をして考えたこと	16頁
広島を訪れて	17頁
今を生きる	18頁

八十年前の「よく晴れた日」を前にして

『原爆』。私はその言葉を初めて聞いたのは、いつだか覚えもない程、前の事です。しかし、この言葉の意味を知ったのは最近のことで、その残酷さを身にしみて感じたのが、この広島訪問でした。

広島には初めて訪れたため、発展した町並みや路面電車の多さに心が惹かれました。ご飯もとても美味しく、「すごくいい街だなあ…」と思いました。

その美しい町並の中に、ひときわ存在感を放つものがありました。それが、原爆ドームです。見た瞬間に心がざわつき、原爆の恐ろしさを肌で感じました。写真では何回も見たことがあるのに、実物を見ないと感じ取ることができない何か、そこにはありました。

二日目に訪れた平和記念資料館では、目を背けたくなるような悲惨な光景が広がっており、息が詰まるような文章も綴られていました。私が特に衝撃を受けたのは、遺族の方や被爆者の方の言葉とともに展示されていた顔写真です。

「花を育てるのが好きな兄でした」

「妹は木の葉のように焼かれてしまいました」

「怪我だらけになっていてもいいから帰ってこないかなあ」

どれも胸が張り裂けるような言葉でした。どれほど辛かったでしょうか。どれほど苦しかったでしょうか。その思いがひしひしと伝わってきました。

また、平和記念資料館を訪れたあと、「第一回全国平和学習の集い」に参加しました。原爆が落とされた時に中学生で、被爆者でもある梶本淑子さんから、直接話をお聞きすることができました。淑子さんは被爆時、十四歳で今の私と同じ年齢です。淑子さんの記憶は鮮明で、語られる言葉一つ一つに重い意味と強い気持ちが込められており、その当時の悲惨さが目の前にあるように感じました。

今回の広島訪問では、三日という限られた時間の中で、普段の生活ではなかなか体験することのできないものを多く経験しました。それと同時に、心にたくさんの「大切なもの」を持ち帰ってきたように感じました。一生忘れることのない三日間。

胸に刻まれたものをただの思い出にすることなく、少しでもこの出来事を知る人が増えるように、私も伝えていきたいと思います。

広島訪問を通して

今回、この訪問事業に参加させていただき、とても貴重な経験ができました。僕は、この事業で、多くの事実や原爆への人々の想いを改めて学ぶことができました。

その一つに、僕は前までは、原爆の威力についてうまく想像できなかったのですが、もし鶴ヶ城に原爆が落ちたと想定すると、地形もありますが一秒のうちに猪苗代湖までの建物が多大な被害をうけ、およそ十五キロメートルの範囲に放射線の黒い雨が降り注いで、絶大な数の人々が亡くなると聞き、改めて原子爆弾の威力を体感できました。

また、グループディスカッションの際、

「どうしたら平和になりますか？」

という議題に答えをだすのが、本当に難しかったです。平和ではない状況として、戦争、ケンカ、宗教の争いなどが出たのですが、それらを解決する方法がなかなかでず、身近な兄妹間のケンカのようにごめんなさいで解決してほしいと素直に考えてしまいました。ですが、世界の問題はとても難しく、平和への道のりは本当に長く困難なものだと、改めて実感しました。

とても難しいことですが、戦争で苦しい思いをした人達や、これからのために必ず実現しなければいけません。そのために、世界中の人が原爆について知る必要があります。そして、「どうすれば平和になるか」を考えてもらいたいです。それが平和への第一歩だと思います。

しかし、現状多くの僕のような学生は、原爆については歴史の教科書で少し学んだだけ、また、多くの人々は原爆について触れる機会は少ないと思います。ですので多くの人に原爆について知ってもらうためにも、僕はこれから多くの人に伝えて平和に向けて努力していきたいです。

戦後 80 年の広島を訪問して学んだこと

一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が世界で初めて投下されました。そこから八十年経った今、僕は広島を訪問しました。

今回の広島訪問を通して印象に残ったことは二つあります。

一つ目は、被爆体験者である梶本淑子さんのお話です。梶本さんは、僕たちと同じ十四歳の時に被爆をされました。当時爆心地から二、三キロメートル離れたところにあった軍需工場で、飛行機のプロペラを作る作業中に被爆されたそうです。梶本さんは、原子爆弾が落とされた時は、「内臓がえぐり出されるような感じで痛く、肩から下はがれきで埋まっていました。」とおっしゃっていました。それを聞いた僕は衝撃を受けました。原子爆弾が落とされた後、僕はそのような被害を受けている人がたくさんいたことをそれまで知らなかったのが、被爆体験講話を受けて、とても複雑な気持ちになりました。

二つ目は、原子爆弾の被害の大きさについてです。原子爆弾により、当時の広島市の人々の五分の二に当たる十四万人もの人が一九四五年十二月三十一日までに亡くなりました。原子爆弾は、上空六百メートルで爆発し、爆発直後の地面の温度は三千度から四千度にまでなったそうです。爆心地から半径一キロメートルにいた人は、即死か全身にやけどを負ったそうです。また、原子爆弾から出た放射線も深刻な問題を引き起こしました。爆発から一分以内に起こる初期放射線と、爆発から数日に起こる残留放射線が多くの人々の命を奪いました。

僕たちが住んでいる福島県も、今から十四年前の三月十一日、東日本大震災で甚大な被害を受けました。特に、津波による被害を受けた浜通りの方では、未だに苦しめられている方がいます。八十年前の広島の人々も、そのような状況から復興を遂げ、中国地方での中枢都市になっています。僕たち福島県も、広島のような復興を遂げ、さらに発展した都市になっていけると僕は信じています。除染や人口減少など課題はありますが、一つ一つ解決していきたいと思います。

そして今、世界全体の核兵器の保有数は一万二千二百四十一発あり、その九十パーセントはアメリカとロシアが保有しています。戦争や原子爆弾は、人と人との

信頼を壊し、多くの悲しみを生み出します。だからこそ、僕たちは歴史から学び、平和の尊さを発信していくことが必要であると考えます。そして、争いではなく話し合いで問題を解決する力を、僕たち一人ひとりが持たなければいけません。原子爆弾で、亡くなった人々の思いを心に刻み、平和な未来を作るために、今僕たちにできることは何かを考え続けていきたいです。

広島訪問を通して

八十年前の八月六日、午前八時十五分。高度約六百メートルの高さで炸裂した、たった一つの原子爆弾により、三十五万人いた人口のうち、十四万人が命を落としました。

私は今までに読んできた本で、広島に投下された原子爆弾と戦争の恐ろしさを理解できていると思っていました。しかし、実際に訪れた広島平和記念資料館で目の当たりにした原子爆弾による被害や、被爆した梶本淑子さんの話は、私の想像をはるかに超える恐ろしさでした。資料館には、原爆投下後の広島市の様子や、道端に転がる死体を収めた写真、血が染みて変色し、破れてしまい原形を留めていない服、焼け焦げた三輪車や弁当箱、亡くなってしまった人々の想いが、隠されることなく現実にあったことが全て収められていました。

今もしこの広島で起きた惨状が、日本もしくは世界のどこかで繰り返されてしまうようなことがあったら、私たちは一体どうなってしまうのでしょうか。被爆した梶本淑子さんから伺った話では、原爆が投下された日、その日はいつもと変わらない晴天でとても暑い日だったそうです。原爆は私たちにとって当たり前の日常、当たり前の風景を十秒もない速さで跡形もなく消し去ってしまいます。これから原爆が投下される日が訪れれば、今まで味わったことのない苦痛や喪失感を受けることになると思います。また、原爆が日本ではないどこかの国に落とされてしまったとしても、日本は食料品やエネルギー資源の半分以上を輸入に頼っている国のため、価格高騰や生活必需品の不足、経済活動の停滞が起こる可能性があり、いつも通りの生活を送ることができなくなるかもしれません。そうならないためにも、今を戦前にさせないこと、非核三原則を未来永劫守っていくことが必要だと思っています。しかし、世界には約一万個以上もの核兵器が保管、配備されており、戦争がいつ起こってもおかしくないと言われているのが現状です。

アメリカの科学雑誌が発表している、核戦争や気候変動など、人類滅亡の危機を象徴的に示す「終末時計」は、二〇二四年は残り九十秒だったのに対し、二〇二五年は史上最短の残り時間八十九秒と発表されていて、この「残り時間八十九秒」と

は、人類滅亡の真夜中までのことを指しています。みなさんは、人類滅亡の危機がすぐ目の前にせまっていることをどう思いますか。私たちは、あたり前にごはんが食べられる、勉強ができる、睡眠をとることができる、家族・友達に会える、遊べる、好きなもの・好きなことがある今を終わらせないためにも、戦争や原子爆弾の恐ろしさについて知り、戦争に反対する意思を周りに、世間に伝えていく勇気が必要になってきます。私も、広島で実際に見た戦争や原爆の恐ろしさをできるだけ多くの人に伝えていけるよう努力していきます。

「広島訪問」を終えて

私が今回の広島派遣で一番心に残ったことは、折り鶴を奉納するきっかけとなる佐々木禎子さんの話である。禎子さんは二歳の頃に被爆した。小学生の時に白血病に見舞われ、入院先の病院で千羽鶴を折り始める。しかし、千羽鶴が折り終わる前に禎子さんはこの世を去ってしまう。彼女の友達が禎子さんに千羽鶴を折ってほしいと呼びかけると、全国各地から、禎子さんや同じように原爆で亡くなった方達のために千羽鶴が寄贈され始めたそうだ。平和を願う思いの連鎖に、私は胸が熱くなった。

今年奉納された鶴だけでも、およそ一千万羽にも及ぶそうで、外国からのものだろう千羽鶴もたくさんあった折り鶴の奉納スペースに、私たちの学校で折った折り鶴も入れさせてもらうことができた。自分の手で入れてみて、折り鶴を折った人々の気持ちが伝わってくるような神秘的な気持ちになった。

今、この原爆を落とされた地、「広島」に世界中の人々が集まっている。原爆を落とした国も、落とされた国も、今まさに戦争をしている国も、そうでない国も、立場は異なっても、みんなで折り鶴を折り、平和を祈っている。そのことが私には不思議であり、そして何より、平和を願う心が世界中にあるのだと思えてとても嬉しかった。

二つ目に印象的だったのは、今年初めて行われた全国平和学習の集いだ。全国から集まった中学生と「今、平和でない状態とはどんな状態か、またそれを解決するためにはどのようなことができるか」というテーマで話し合った。とても難しいテーマだったが、全国各地の中学生と意見を交流し、「私たちが戦争について知り、一人一人が平和について考え続けていくことこそが平和につながっていくのではないか」と考えることができた。

この広島訪問で学んだことを家族や友達など周りの人に伝えていくことで、平和のために考え続けていく取組を実践していきたい。

広島訪問を通して

僕が広島を訪問して特に感じたことは、二度と戦争を繰り返してはいけない、核兵器を廃絶しなければいけないということです。

僕たちは二日目に、ガイドの方の説明を聞きながら原爆ドームを見学しました。原爆ドームは爆心地のすぐ近くにありながら建物の骨組みだけが奇跡的に残り、今も当時の姿のままで残っている数少ない建物です。実際に見たその姿からは、原爆の凄まじい破壊力と、そこにあった人々の暮らしが一瞬にして失われたということが強く伝わってきました。ガイドの方の話を聞いて、原爆ドームは過去の悲劇を語り継ぐ大切な記憶の場であると感じました。

その後訪れた平和記念資料館では、実際に被爆した人々の遺品や写真などが展示されていて、原爆の被害の大きさを改めて実感しました。中でも特に印象に残っているのは焼け焦げたお弁当箱です。自分と近い年代の人の生活が一瞬にして奪われたことが伝わり、胸が苦しくなりました。

そして、その後被爆者の方による被爆体験講話と、グループディスカッションがありました。実際にその場にいた人の話は教科書などでは学ぶことのできない重みがあり、話を聞いているうちに胸が詰まる思いがしました。この貴重な体験を通して学んだこと、感じたことをなるべく多くの人に伝えていきたいです。グループディスカッションでは、平和な社会を作るためには、人を傷つけないことや交流を大切にすることが必要だという意見が出ました。話し合ったことを日常生活でも活かしていきたいです。

今回の訪問で、平和の尊さと、それを守ることの難しさを感じました。平和が当たり前になっている今だからこそ、無関心でいることが一番の危険だと思います。これからは小さなことにも関心を持ち、積極的に行動していきたいです。

広島訪問

私は夏休みに広島を訪れ、原爆や平和について学んできました。

一番最初に向かった原爆ドームでは、初めて目の前にしたとき「ここで多くの人が命を落としてしまったのだ」と思い、胸がぎゅっと苦しくなり、切ない気持ちになりました。2日目はガイドさんの話を聞きながら原爆ドームを見学し、爆心地や原爆を落とした理由、その当時の状況などいろいろなことを知ることができました。

2日目に行った平和記念公園にある「原爆の子の像」の前では私たちは折り鶴を奉納してきました。湊学園、全校生が平和への願いを込めて今回、私が代表として奉納しました。そこには全国や世界から送られたたくさんの折り鶴が飾られていて、その色とりどりの光景に、私たちと同じように平和を願う人たちがこんなにもいるのだととても心を驚かされました。そして、少しでも平和の力になればいいなど願いながら、手を合わせました。

次に向かったのは平和記念資料館です。ここは私が一番見学してみたかったところです。初めて平和記念資料館を見学し、展示されている写真や衣服、遺品の数々を目にして、とても心が苦しくなりました。そこには、原爆によって火傷などで傷つき、命を奪われた人々の現実が詳しくわかり、一つ一つ時間をかけて見ました。あの日、たった一発の爆弾で、こんなにも多くの命や日常が奪われたのだと思うと信じられないような気持ちになりました。戦争がもたらす残酷さを目の当たりにし、私は、このような出来事は絶対におきてはいけないと強く思いました。

広島国際会議場で行われた「全国平和学習の集い」では、まず最初に実際に被爆を体験した方の話を聞きました。私は数ヶ月前に、被爆体験伝承者の方が中学校を訪れ、原爆の話は聞いていましたが、実際に体験した方の話を聞くと、一回目に聞いた話とはまた違う感じがし、被爆者の当時の思いを知ることができてとてもよかったです。被爆者の方は、このことを一人でも多くの人に知ってほしい、感心してほしいと思っているそうです。なので私たちが少しでも多くの人にこの広島のことを伝えていこうと思いました。そのあとは、他県の中・高生の人たちとグループになって平和について考えました。そこでは、差別や偏見をしない、世界の現状をよ

く知る、非核三原則などを心がければ、世界は平和になるのではないかと考えました。ここではいろんな人の意見を聞くことができ、とてもいい時間でした。

この3日間を通して原爆のことをいろいろ知ることができ、平和について考えることができました。これから私は、今回広島で学んだことを周りの人に伝えたり、平和について考え続けることで、小さなことでもできることをしていきたいです。広島の人々が伝えようとしている「平和への願い」を、これからの時代にもつないでいけるように自分自身も成長していきたいと思います。この広島訪問ではいろいろなことを考え、とても貴重な3日間になりました。

広島訪問を経て感じたこと

人類史上初めて原子爆弾が投下された一九四五年八月六日のちょうど八〇年後に、私はその地、広島を訪れることができました。それと同時に、私達はあの日のことを決して風化させてはいけない、忘れてはいけないと強く考えました。

二〇二五年の今、広島街には近代的なビルが立ち並び、その間を縫うように路面電車が走っています。とてもきれいで素敵な町です。八〇年前、原子爆弾そのものの被害、あるいは放射能の影響で、広島には七十五年は草木が生えないと言われていました。ところが今、広島街は、大きな進歩を遂げています。あれだけの被害を受けてなお、街を立ち直らせた広島の方たちの力はとてもすごいと思います。想像もできないような苦勞や努力があったのだろうな、と感動しました。

美しい街並みの中に、大きな川が流れていました。あの日、熱線を浴びて苦しんだ人々が次々に飛びこんだそうです。翌朝、死体であふれかえった川の光景を想像し、私は何も言えませんでした。

その川のそばには、悲しい歴史を今に伝える原爆ドームがありました。当時の衝撃を感じさせる外観に私はただただ圧倒されました。頑強な建造物が骨組みを残して破壊される熱線を身体に浴びた人々は、どれほど痛く苦しかったでしょう。原子爆弾は、自分の想像したものよりもはるかに恐ろしかったのです。

被爆体験講話が行われ、被爆当時十四歳だった梶本淑子さんのお話を聞くことができました。「今日聞いた話を、できるだけ多くの人に伝えてほしい」梶本さんの悲痛な思いがひしひしと伝わってきました。そして、八月六日の式典で、平和への誓いを述べた小学生の言葉が印象に残っています。「OneVoice」。たとえひとつの声でも、思いを込めて伝えれば変えられるものがあります。だから私は、ヒロシマで見てきたこと、聴いたことをひとつでも多く、ひとりでも多くの人に伝えたいと思います。

できることが少ない私でもできる唯一の伝えるということ、これからも続けていきます。つい背を向けたくても、受け入れがたい内容でも、理解して同じ歴史を

繰り返さないために私たちにできることを考えてみてほしいです。私も今回学んだことを忘れず、後世に残していきたいと思います。

広島訪問事業を通して感じたこと

これまで僕は、原爆についてニュースで流れていても、意識して考えたことは正直ありませんでした。しかし、戦後八十年目の今と落とされた当時の状況を詳しく知りたいと思い、この夏、広島訪問に臨みました。特に印象に残っていることを三つお伝えします。

一つ目は、原子爆弾の恐ろしさについてです。リトルボーイという可愛らしい名前とは裏腹に、とてつもない破壊力を秘めていることに改めて衝撃を受けました。

「朝八時十五分に上空六百メートルで強い光と三千度から四千度の熱波を放ち、半径、二キロメートルをさら地にした。十四万近く、人が亡くなった。」これは、資料館を見学したときに見つけた文章です。他にも、皮膚がずたずたにむけている写真や顔も判別できない水死体の写真を目にしました。いつも通りの暮らしを送っていた人々が、一瞬にして死んでしまったという事実を痛感しました。

二つ目は、人々の思いです。原爆ドームをなくそうという案もあったそうですが、これを忘れてはいけないと、あえて残し、何回も補強工事がされてきました。千羽鶴の奉納場所や慰霊碑、平和の灯などを目にし、当時の状況を多くの人に伝え、反戦の思いを広めるのだという強い思いが伝わってきました。

三つ目は、正しい知識です。僕は、爆心地は原爆ドームの真上だと思っていました。ですが実際は、相生橋を目標にして投下され、原爆ドームから百五十メートルほど離れた現在の島内科医院という場所が爆心地だったことがわかりました。また、七万の遺骨があり、八百十二人しか名前がわかっていないことなど、たくさんを知ることができました。同時に、これを知っている人は何人いるのだろう、そう思いました。この機会ですんだことを無駄にはせず、これからも原爆に関心を持ち続け、多くの人に伝えていきます。

広島訪問を通して

私は今回、北会津中学校の代表として広島訪問事業に参加し、三日間で様々なことを学ぶことができました。初めて訪れた広島は、八十年前の出来事が嘘かと思うほど発展しており、活気のある街でした。

今から八十年前の八月六日、午前八時十五分。広島に一発の原子爆弾が投下され、一瞬のうちに街が壊滅的な被害を受けました。被爆直後の姿を留めている原爆ドームや被害者の遺品など、今まで動画や画像でしか見たことがなかった物を直接目にしたとき、どれだけ悲惨なものだったのかを知ることができました。

被爆体験講話では、被爆者である梶本さんから、当時の様子や終戦宣言時の思いを聴くことができました。「もっと早くに終わらせていれば、たくさんの方が死なずに済んだのに」と聴いたとき、戦争は繰り返してはいけないと改めて思いました。被爆体験を話せる人が減ってきている今、こうして語られた思いを伝えていくことが私達の役目なのだと気付かされました。

また、グループディスカッションでは、様々な地域から訪れた中高生と平和について話し合いました。どうすれば平和になるのか、身近な家族や友人との争いに的を絞り、解決方法を考えました。話し合いの結果、相手を知る、話し合う、認め合うという考えが出され、国同士の争いにも身近な争いにも話し合うことが重要だという意見にまとまりました。

さらに、平和記念式典の中で松井市長は、「被爆の実相を自ら確かめ、平和を願う『ヒロシマの心』を理解してほしい」と述べていました。

今回の訪問で、戦争・原爆の恐ろしさや悲惨さ、平和の大切さ、被爆者の思いを深く知ることができました。その思いが世界中に伝わり、この世界から戦争がなくなる日が訪れることを心から願っています。

広島訪問をして考えたこと

戦後八十年。現在の広島市は緑にあふれ、路面電車が走り、高層ビルが立ち並んでいます。この地に原子爆弾が投下されたとは思えないほどの、都会的な街並みです。

一九四五年八月六日、午前八時十五分。街には職場や学校に向かう人もいれば、疎開の準備を行う人々がいました。戦時中とはいえ日常が流れていたことでしょう。

しかし、突然、空に真っ青な光が流れ、猛烈な熱さと爆風と共に、辺りは真っ暗になったそうです。

訪問の二日目に原爆資料館で見たものは、どれも目を背けたくなるほど恐ろしいものでした。市内中心部で被爆した人たちの裸の体は真っ黒で、髪の毛は逆立ち、両手の皮膚が垂れ下がっていたと聞きました。そして、かろうじて聞こえるような声で「熱い、熱い。」と倒れて亡くなる人。炎で燃える路面電車の中で亡くなる人がいて、約十四万人の人々の命が一瞬で奪われました。

考えていたよりも、とても悲惨な状況であったことが分かり、心臓がバクバクするような衝撃を受け、頭や心に刻まれました。

無差別に尊い命を奪う核兵器は、今もアメリカやロシアなどの国々が、一万二千個以上所持しています。

核兵器ゼロの世の中を作るため、私にできることは、今回の広島訪問で学んだことを家族や友人に伝え、戦争や核兵器の恐ろしさを訴えていくことだと思います。学んだことをこれから学校で発表するなど、平和な世界のために少しでも貢献したいと思います。

広島を訪れて

八月六日午前八時十五分、広島で祈りを捧げた経験は、これからの私の生き方に、深く結びついていくだろう。

私は、八月四日から六日の三日間で、広島を訪問した。

はじめに、原爆ドームを訪れた。爆風に耐え、今でも残されたそれは、八十年前の惨状を私たちに伝えているように感じた。そこで、広島は当時、「七十五年は草木も生えない。」といわれていたことを知った。しかし、被爆からわずか一ヶ月後には、焼け跡にツルやイモの葉、そして折れた街路樹からは新しい葉が芽吹いたときいた。そんな命の芽吹きが、絶望の中にある希望になったのではないかと感じた。

つぎに、平和記念資料館を見学した。当時の悲惨な状況を、私たちに伝えるさまざまな展示物。それらは、失われてしまった尊い命と日常を物語っていた。私は正直、どんな展示物を見ても「怖い」と感じるばかりだった。また、資料館を訪れる人は、海外から来ている方がとても多いように感じ、それも印象に残った。

平和学習では、実際に被爆を経験した方から話をきいた。当時の人々が、戦争に対し、どのような考えを持っていたのか、戦後どのように生きてきたのか。学校の授業だけではあまりイメージが湧かなかったことを、しっかり知ることができた。

そして、最後に平和記念式典に参列した。核兵器がどれだけ恐ろしいものか、平和がどれだけ尊いものか、三日間の最後に改めて感じる事ができた。

この広島訪問を通して、どんなに小さなことでも、平和のために自分にできることを考え、行動したいと思うようになった。私たちの未来のために、平和な社会を築いていけるよう努力したい。そして、自分だけで終わらせず、たくさんの人にこれを伝えていきたい。

今を生きる

むき出しの鉄骨。崩れ落ちたレンガ。そこは時間が止まっているようだった。教科書やニュースで何度も目にした光景が今、目の前に迫る。崩れ落ちそうになりながらも存在感を放つ原爆ドームは重い空気と静寂を纏い私の言葉を奪った。

今回の広島市訪問で、私は戦争の現実を肌で感じる貴重な体験をした。資料館の遺品や写真、惨状を伝える言葉に胸が締め付けられた。七五年間は草木も生えぬと言われながら復興を成し遂げた広島姿には人々の力強い生命力を感じた。

特に印象深かったのは、第一回全国平和学習の集いだ。一四歳で被爆された梶本淑子さんの話は、生々しく痛ましかった。無数のガラスが刺さる痛みや人が腐り焼かれていく匂い。助かっても白血病や癌に苦しみ続ける人がいるという現実。普段の私の日常がどれほど脆く尊いものかを思い知らされた。梶本さんは互いの個性を尊重し、人を大事にできるやさしい人になって欲しいと訴えた。グループディスカッションでは、全国各地から集まった中・高・大学生と意見を交わし、普段のコミュニティの枠を超えた多様な考え方に触れることができた。「今平和でない状態とその解決方法」というテーマが特に心に残った。戦争や紛争、領土問題などだけでなく、いじめや偏見、理不尽な校則なども平和を阻む。解決の鍵は話し合い、助けを求める勇気、熟考した発言、仲間と声を上げることなどにある。正解はないが、私たちにもできることは確かにある。

戦後八〇年、被爆体験者が減り続ける今、真実を伝え続ける重要性を痛感した。

「無知と無関心は共犯者」

梶本さんが取り上げてくださった言葉が胸に響く。今を生きる私たちが行動しなければ平和は守ることができない。私は本事業での学びを忘れず、平和への関心を持ち続け、行動していきたい。